児童養護施設・里親を巣立った若者の再出発と自立を支える場としてのシェアハウス運営

－安心して住むことの出来る居場所の必要性－

特定非営利活動法人若者の自立支援すみれブーケ
内田　朝代

（生きづらさを抱える若者の自立　社会的養護　若者の居場所）

１．目的

18 歳になり児童養護施設から退所した若者は、その後の支援が少ないなか過ごさなくてはなりません。様々な困難に立ち向かう若者たちの「実家となる居場所をつくりたい」という思いでＮＰＯ法人を立ち上げました。さらに多くの若者の居場所を設けるために平成 29 年 3 月世田谷区桜上水に新たなシェアハウス「すみれハウス」を開設致しました。施設や里親、ひとり親家庭などを巣立った若者が帰ってこられる場、休息や相談に訪れられる場、就労のための準備ができる場、そうした実家としての居場所シェアハウスを提供することで、彼らの社会的自立と再スタートを支援しております。
2020 年現在 2 軒目のシェアハウス開設を目指しております。

２．実践内容

「家庭的なサポートと専門家によるサポート」

コーディネーターふたりを配置し、何かあったときには相談でき、〝一人ではない〟と思ってもらえるよう家庭的な寄り添いを行っています。若者たちの笑顔が成長に「すみれブーケ」の活動の意義を感じています。家庭的なサポートと合わせて生活面だけでなく精神面支援なども行い、また学識経験者や児童養護施設長など専門家による支援委員会を設けサポートを行っており、若者や同居する社会人等への助言等を通じて、自立へのサポートを厚くしております。

３．結果

開設以来若者の再スタートを支える場としての「すみれハウス」から 3 名の若者が自立することが出来、彼らにとって自立後に遊びに、また休息しに帰ってこられる実家となる場所が出来ました。
現在 3 名の若者が利用しております。社会の自立に向けたスモールステップアップ（緩やかな自立への道程）が行えることで、安心と安全の確保ができ、経済的な貯蓄にとどまらず精神的な成長、彼ら自身が学び育つ場（エンパワーメント）できる場として効果が大きいことがわかりました。

４．考察と今後の課題

当団体は制度外の試みのため公の補助金等は無く、会員様の会費や寄付金で事業を行っております。また、地域の行事に参加した際には多くの方々からたくさんのご支援と応援をいただいております。シェアハウス運営のための資金を調達しなければなりません。行政等の制度としての若者支援は整えられてはきていますが、まだ支援は不十分と考えられます。
2020 年新型コロナウィルスの影響により若者の経済状況が厳しくなりました。また当法人もまた、地域のイベント中止に伴い、広報活動も出来ず、寄付等のお願いもすることが出来ない状況が続いております。

2019.11 月福音寮まつり

2019 年～2020 年　すみれハウス食事会

2020 年夏　すみれ花火大会

※新型コロナウィルス感染防止対策の為、ハウス内での食事会等開催が困難となり、野外も含め利用者である若者たちとスタッフのコミュニケーションをとる試みを模索しております。

＜助言者コメント＞　　樋口　美津子（子どもの生活研究所めばえ学園長）

今回の実践発表にある「実家となる居場所を作りたい」という思いからスタートしたシェアハウスの存在は、若者にとって非常に必要な場所であると改めて感じました。それぞれの人にとって家庭や家族の存在は人生においては必要不可欠な存在であることは言うまでもありません。そして人間というのは、いくつになっても自分を理解し、受け入れてくれる、あるいは自分に適切な助言をしてくれる人が側にいることは必要です。その人が個人の力だけで対応していくことには限界があることもあります。実践発表にある職場や学校、人間関係等、精神的に追い込まれた若者が孤立してしまう状況が起きた時に、自身が考える自分の望みと現実のその人の在り様が合わないことも多々あり、何故上手くいかないのか、何が問題かと理解できず、また整理できずにいることもあります。その時に相談出来る存在や場所がないことで、生きていく場所が失われていくことを危惧します。

この実践では『困った時、いつでも一緒に考える事が出来る場がある』『一人ではないよ』と彼らに声を掛け、寄り添い続ける支援をきめ細かく丁寧に取り組んでいます。若者がその人自身で考えてやり直していこうとするゆとり、時間を持てることが、その先にその人が自分の力で人と共に生きていこうとすることにしっかりと繋がると感じます。緩やかな社会的自立に向けた道程、スモールステップアップが行えるような社会全体での仕組みが今は確かに十分ではありません。その中で今回の実践のように、若者に寄り添い続け、若者自らが育ち学ぶ場を、様々な人が温かい思いで協働しながらサポートしている支援体制を、しっかりと支えていく仕組み（制度等）の必要性を切実に感じさせられました。